

窯火長紅

—浙江古代磁器業の概況—

沈 岳 明*

訳 黄 利 斌

序 論

1. 浙江手工業の優良伝統

河姆渡象牙裝飾品、良渚文化玉器刻紋、鑄劍、銅鏡、漆器、金銀器、東陽木彫、青田石雕、絵画篆刻工芸、シルク、陶磁等。

2. 浙江の中国陶磁史における位置づけ

『中国科学技術史・陶磁巻』には、陶磁の発展プロセスにおいて5つの里程碑及び3つの重要な技術突破とまとめられた。5つの里程碑とは、新石器時代に早期陶器の出現；商周時代に印紋硬陶と原始磁との焼成成功；漢晋時代に南方青釉磁の誕生；隋唐時期に北方白釉磁の突破；宋代から清代までに釉磁と彩絵磁における輝かしい成果ということを指す。3大技術の突破とは、原料の選択と精製；窯炉の改善と焼成温度の高まり；釉の形成と発展という3つのことである。その中、製磁の歴史上に原始磁の起源と成熟した青磁の出現という2つの躍進、及び3大技術の突破において浙江は積極的な役割を果たした。これもまた浙江が全国ひいては全世界製磁中心の地位となった一因である（図1）。



図1 浙江省全図

*浙江省文物考古研究所

I 横空出世

陶器と磁器との区別

- ① 磁器は磁土（高嶺土）で胎を作られ、磁石・高嶺土・白坩土・紫金土等が含まれる。陶器は陶土が使われ、磁土はめったに使われない。
- ② 磁器は1200℃から1300℃までの高温で焼かれ、胎体が焼結され、胎の質が細白くて硬く、叩くと金属物のような音がする。陶器は一般に1000℃以下の温度で作られ、胎色が豊富で、叩くと鈍い音がする。
- ③ 磁器は吸水性が弱く、あるいは吸水しない。陶器の多くは吸水性を具える。
- ④ 磁器は表面にガラス釉が塗られるが、素焼きのものもある。陶器は一般に釉が無く、あるいは低温釉や彩色衣等を施す。
- ⑤ 磁器は薄くて透光性がある。陶器は光が透けない。

上述の5点のうち①、②は一番重要である。

磁器の出現は古代人の社会生活や生活習慣に大きな変化をもたらした。さらに現代社会においても欠かせない重要な材料として、日常生活だけではなく、航空や宇宙飛行などの工業とハイテク分野にも応用されている。

今までの考古成果からみれば、浙江省に原始磁の焼成が初めて現れたのは少なくとも商代早期に遡る。戦国時代は原始磁が最も盛んに生産されていた時期である。碗・杯・碟・盅などの日用品の他に、さらに大量な鼎・甗・豆・尊・簋などの倣銅礼器、また新しく編鐘・句鑼・鐃于などの倣銅楽器、倣銅兵器・工具や農具さえ作られ、ほとんど社会



図2 戦国時代の原始磁器

の各方面の需要に応じていった。焼成温度は1100℃～1250℃のものが多く、1300℃に達したもののすらすら数が少ないながら作られた。多くの青銅器の花紋もはじめて原始磁に応用され、原始磁生産の最高水準を代表するとも言える（図2）。

戦国中期以後、楚が越を破り、そして楚が秦に滅ぼされたので、越地域の輝かしい製磁手工業は大

きな打撃と破壊を受けた。また、楚文化要素の強勢な侵入も直接に原始磁生産を衰退させたと考えられる。

秦漢時代に揚子江下流の古呉越地域ではまだ胎釉の品質が低い原始磁を焼いていたが、それらの原始磁はよく「高温釉陶」と呼ばれていた。この種の製品は前漢初期に現れ、後漢中期に至って大体消えてしまった。

Ⅱ 成熟へのプロセス

漢代、特に漢武帝が在位した時期、統一的な封建帝国が強まり、社会経済活動が盛んに行われ、文化運動も勢いが凄まじかった。文化特徴の重要なシンボルの一つとして、成熟した磁器が出現し、鮮明的な時代性と傾向性をもつものである。新しい品種と工芸の出現、及び新しい形式とスタイルの誕生などの新たな力は陶磁芸術をより前へ推進していった。後漢中晩期に、成熟した青磁が創造的に焼成されたことにより、それまでの陶器が単独に盛んであった世界が変わり、磁器は新たな姿で現れ、主導的な地位に躍り出て、新たな時代が切り開かれた。

成熟した青磁は最初に永平10年(AD67年)の江蘇邗江甘泉二号漢墓の中から出土した。1924年に信陽擂鼓台永元13年(AD101年)の漢墓の中から青磁碗と青磁蓋が一つずつ出土した。その他の大



図3 後漢～東晋時代の成熟磁器

部分は紀元150～200年の間に現れた。そのため、紀年墓の材料から、紀元100年前後に漢代の青磁が始めて出現し、紀元150年後の後漢中晩期に大きな発展を遂げたことが確定できる。

曹娥江流域に後漢時代の窯跡は40ヵ所近くある。上虞の他に、紹興・寧波辺りにも後漢の窯跡が少ないながら分布している。主に甌・壘・罐・壺・洗・碗などの器型があり、装飾として弦紋・水波紋・網格紋・櫛状紋・葉脈紋・菱形短直線紋等がある。

成熟した青磁は後漢中期から出現し、後漢末期の初歩的な発展を経て、三国西晋時期に至って、発展上の初めてのピークを迎えた。上虞地域ではこの時期の窯跡の数は160ヶ所にも達し、生産量が急激に増え、全国各地の墓に副葬品としてこの時期の青磁器が大量に供給された。三国時期の呉国の都城として、南京に豪族が多く集まっていた。一方、上虞が青磁の生産中心であり、「水に近き楼台は先に月を得」と言われるように、この時期の高級的な青磁は主に南京付近と上虞地区から出土している。

生産品の種類・造型・装飾・胎釉の品質は何れも新たなレベルに達した。器物の種類が複雑で、漢代の鍾・甌・壘・五管瓶等もうほとんど見えなくなり、新たな器型が大量に現れ、生産・生活の各方面に及んでいった。セットとなった明器は墓の副葬品として一番よく使われていたもので、人々は「死を視るに生の如し」という信仰の下に、生前に使っていた生活用品を丸ごと地下に移したとみられる。

東晋南朝に至って、生産規模が急速に縮まり、上虞地域の窯跡の数が20ヶ所ばかりに減った。上虞地域の他に、紹興・萧山・慈溪・寧波等の地域にも多少の生産があった。

東晋・南朝時期に、曹娥江中流を代表とする浙江の磁器生産業が谷間に入り、全国他の地域に得難い機会を与えた。江西の豊城窯・湖南の湘陰窯・四川の邛崃窯・江蘇の宜興窯などの勃興によって、全国の磁器生産業の分布は浙江の「一枝独秀」から新生代窯と老舗の窯と並立する局面に変わった。一方、この時期に同時にまたは少し遅れて新興した金衢地区の婺州窯・温州地区の甌窯・東苕溪流域の徳清窯などの窯もこの時代に大きな影響をもたらした。

485年に魏孝文帝が均田制を実行し、また地主を抑制しながら、農民を援助する措置を採用したことによって、農業生産や手工業を復興させた。特に、魏孝文帝は洛陽に遷都してから、南齊人を使い、礼を制し楽を作り、漢化政策を実行し、南方と北方との交流・融合をさせたことから、南方の青磁工芸が北方に伝わってきた。

Ⅲ 絶世秘色

陸龜蒙の『秘色越器』は「九秋風露越窯開き、奪ひ得る千峰の翠色の来たるを」と述べ、最初に「越窯」と「秘色」を関連させた文献である。

上林湖に窯跡は117ヶ所分布し、その中に、漢と三国の窯跡7ヶ所、南朝の窯跡1ヶ所、唐や宋の窯跡109所ある。

秘色磁に関して、多くの観点はあるが、秘色



図4 秘色磁とその焼成工芸

磁の本当の意味を全面的に表せないと思う。

1. 越窯の佳品は秘色磁だという説は具体的ではない。

2. 秘色磁は一種の青緑色の磁器である。法門寺で出土した秘色磁によって、基本的にこの観点が否定された。何故ならば、青黄色釉の磁器も秘色磁と呼ばれるのである。

3. 神秘。宋代周輝の『清波雜誌』に『越は秘色の器を上とし、錢氏有国の日に供奉物にして、臣下用ひるを得ず、故に秘色と曰ふ』とある。

実際に、秘色磁は焼成の工芸上に独自に一家をなし、ひいては生産品の品質も天下をひときわ抜きん出るといふ最終結論が出される（図4）。

IV 王安石変法が磁器生産の分布にもたらした影響

王安石は変法の初めから科買という政府仕入れ制度の弊害の改革に力を入れ、大規模に請負制を推進した。本来地方政府に委託した供え物の科買を市易務に請け負いさせる。

市易法の実施によって、国の経費が節約された一方、弊害も現れてきた。請負経営がもたらされた結果、商品の品質が保証できないことである。宮廷から産地へ人を派遣し高い品質の商品を買うのと、市易務で一定の品質標準で現地購入するのとの間に差異がある。芸術鑑賞水準の違い、購入された商品の種類と宮廷の需要もそれほど調和していなかった。磁器の使用だけについては、「用ふるに堪へず」という事象まで現れてきた。そのため、「製様需索」の方法が適時に採用された。その後、「遂に汝州をして青器を造らしむ。故に河北・唐・鄧・耀州悉く之有り、汝窑をば魁と為す。江南側ち処州龍泉县窯、質頗る粗厚なり」といふ磁器生産の分布が形成された。

V 河濱遺範

北宋が滅ばされた後、北方の人は大量に南へ遷移し、全国の政治経済文化の中心も南へ移った。それに加え、北方の汝窯・定窯等の名窯は戦火に破壊されたため、製磁技術が南方に伝わってきた。当時の龍泉窯は南北の技術を融合させ、速く成熟へ進み、自己の風格を養成し、ひいては比較的大きい磁窯体系が形成された。胎釉の配合だけではなく、造型設計・施釉方法・装飾芸術及び装窯焼成も大きく改善された。さらに、器形の種類も豊富になった。胎釉の配合を熟練したため、多次施釉技術及び焼成環境の制御もでき、釉色が純正し、粉青釉と梅子青釉はすでに青磁釉色の美の頂点に達し、中国磁器史に輝かしいページを開いた。

龍泉窯は主に甌江の上流地域に分布し、窯跡の所在地は山の坂や溪流が多く、磁器生産の必要な自然環境に恵まれる。

20世紀50年代から今までの調査から、龍泉窯系の青磁窯跡は龍泉・慶元・雲和・景寧・麗水・遂昌・松陽・縉雲・武義・青田・永嘉・泰順・文成及び福建浦城・松溪等に



図5 龍泉南区と東区製品の比較

分布し、600カ所余りに達した。窯場の数が多く、分布範囲が広いという磁窯体系は形成され、その中に龍泉市に窯跡は最も密集している。第三回全国文物調査の統計によれば、龍泉市境界内に青磁窯跡は395カ所ある。

龍泉窯跡の分区

習慣によって龍泉境界内の窯跡は南区と東区という二つの区域に分けられる。南区窯跡は龍泉市内より南の窯跡を指し、187カ所ある。東区窯跡は龍泉市内より東の窯跡を指し、雲和の一部分も含まれ、窯跡が200カ所ある。現在、東区窯跡の基本部分は緊水灘水庫に水没している。

製磁と装焼の工芸

南宋時代に、厚胎薄釉製品の基に、龍泉窯は北方汝窯・官窯等の焼制技術を吸収し、胎土の配合を改善し、磁土の中に適量の紫金土を混ぜ合わせた。これによって、アルミナの含有量が増加され、

抗湾曲度が高められ、器物が高温の下でも変形し難くなる。また、「笨重粗厚」の特徴を克服し、坯体を薄めて、器物の造型をしなやかで美しくさせた。さらに、釉薬の配合を改善し、元

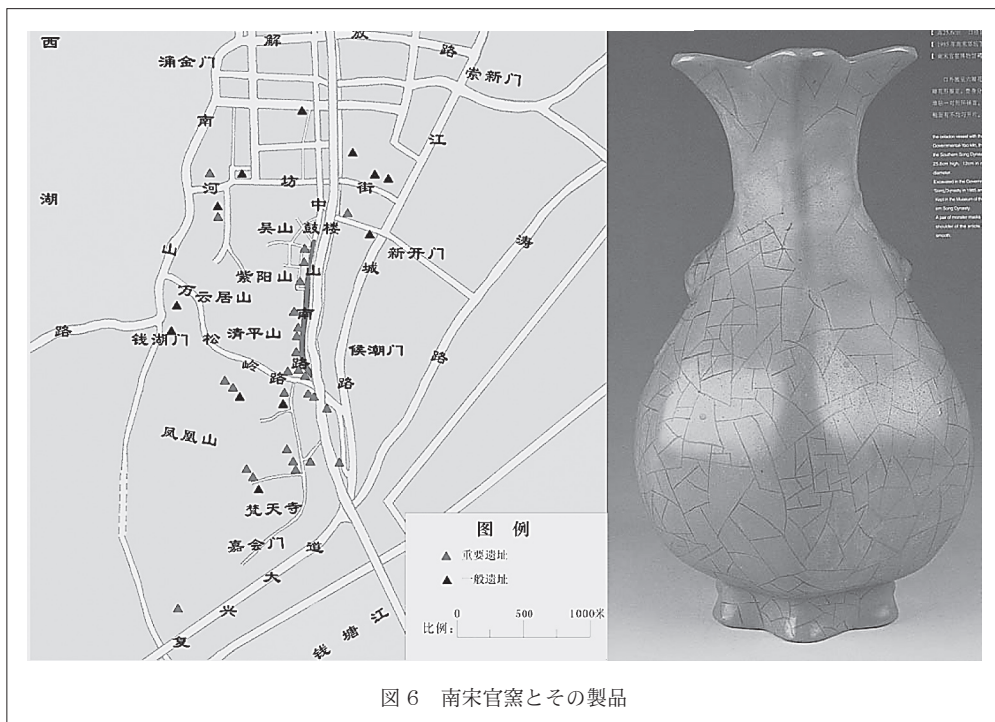


図6 南宋官窯とその製品

の石灰釉を石灰塩釉に変え、胎が紙のように薄くなり、多層に釉を塗り、釉色に粉青、梅子青等の色が現れた。

その中に、黒胎青磁製品は飾り磁器を主として、薄胎・厚釉・貫入・紫口鉄足にまとめることができる。その造型・釉色・製作工芸は南宋官窯と類似している。瓦窯垆の黒胎青磁の生産は越窯上林湖の低岭頭型磁器と同様に、当地の伝統的磁器生産業と大きく違い、その自身の歴史発展の過程の中に、その発生と成長過程の痕跡が見つからなく、特定の歴史時期に発生した特例だとみられる。

VI 異彩を放つ

浙江省内の磁器生産業は浙江の伝統的な青磁だけではなく、積極的に他の地域から特色のある磁種を取り入れて焼成する。主に青白磁・彩絵磁・青花磁・天目磁等がある。